

「メロディ」

—初稿—

2025/07/04

さいの

〈人物表〉

北川 莉子 きたがわ りこ
(23)

スーパーの社員

山崎 愛菜 やまざき まな
(35)

莉子の同僚

岡村 北斗 おかむら ほくと
(58)

莉子の働くスーパーの店長

北川 真由 きたがわ まゆ
(53)

莉子の母

北川 裕 きたがわ ひろし
(55)

莉子の父

1. 莉子のアパート・室内（夜）

電気の消えた室内。壁掛け時計の秒針の音。
北川莉子（23）、ベッドの上で横になっている。
寝ているかと思いきや、静かに目を開ける。
うっすらと、壁越しに男の歌い声が聴こえる。
マーチ調のゆったりとした曲調。
莉子 「……なんだっけ、これ」

2. スーパーマーケット・店内（朝）

開店前の店内。岡村北斗（58）、カートに乗せた
商品を次々と棚の前に運んでいく。
山崎愛菜（35）、あくびを噛み殺しながら商品を
棚に陳列している。
莉子、今やってきたばかりという格好で岡村に駆け
寄って、深々と頭を下げる。
莉子 「……すみません」
岡村 「またかお前」
横目で見ている愛菜、あちゃー、という顔。

3. スーパーマーケット・控え室（昼）

制服のエプロン姿に着替えた莉子と愛菜、座って水
を飲んでいて、
莉子 「起きる時間、三回唱えてるんですけど」
愛菜 「何それ」
莉子 「なんでも三回唱えたら、上手く行くんです」
愛菜 「でも、上手く行っていないじゃん」
莉子 「それは、ちょっと、寝不足で」
愛菜 「……？」
岡村 「おい。さっさと開店準備しろよ」
と、控え室のドアを開ける。開け放たれたドアから
店内放送の陽気なクラシック音楽が漏れ聞こえる。
愛菜 「はーい」
と、急いで店内に戻る。

一方で莉子、不意にボーッと座ったまま、両手の指

を机の上に乗せて、おもむろに背筋を伸ばす。
何か言おうと息を吸って、
愛菜 「（戻ってきて）こら、行くよ」

4. 莉子のアパート・外観（夜）

木造二階建ての古びたアパート。

5. 莉子のアパート・室内（夜）

莉子、ベッドに寝転がってスマホをいじっている。
一息ついて、

莉子 「……六時半、六時半、六時半」

と、電気を消して、目を瞑る。

× × ×

うっすらと、壁越しに男の歌い声が聴こえる。

莉子 「（小声で）……うっせー」

莉子、開けていた目をぎゅっと目を瞑る。

6. スーパーマーケット・控え室（昼）

愛菜と莉子、座って弁当を食べている。

愛菜、イヤホンを付けて音楽を聴いている。

莉子 「愛菜さん、愛菜さん？」

愛菜、話しかけられているのに気づいて、イヤホン
を外して、

愛菜 「え？ 何？」

莉子 「音楽、詳しいですよね？」

愛菜 「……まあ、そこそこ？」

莉子、鼻歌を奏で始める。

愛菜 「……？」

莉子 「……知ってます？」

愛菜 「知らない。何の曲？」

莉子 「分かりません」

愛菜 「何それ。うろ覚えってこと？」

莉子 「そんな感じです。なんか分かりません？」

愛菜 「いや分かんないよ。そんだけじゃ」

莉子 「（詳しいって言ったのに）そっかあ……」
愛菜 「いや、なんか他に覚えてないの？ 歌詞とかさ」

7.

莉子のアパート・室内（夜）

電気の消えた室内。莉子、ベッドに横になっている。
莉子 「……六時半、六時半、六時半」

と、すぐに男の歌い声が聴こえ始める。
莉子、舌打ちして目をぎゅっと瞑るが、思いついた
ように再びパツと目を開く。

机の上の水の入っていたコップを飲み干す。
コップの飲み口を壁に押し当て、耳をあてる。

莉子 「……」

男の歌い声が、少し鮮明に聴こえる。
莉子、聴きながらスマホでメモを取る。

莉子 「か、が、や、く、み、ら、い、の？」

8.

スーパーマーケット・控え室（昼）

愛菜、莉子のスマホ画面を見ていて、

愛菜 「これってAメロ？ Bメロ？ サビ？」

莉子 「いや、分かんないです」

愛菜 「分かんないことないでしょ」

莉子 「多分、サビとかがある曲じゃないです」

愛菜 「何それ」

莉子 「あるじゃないですか？ そういうの」

愛菜 「……歌詞ググっても出ないなら、どっか間違ってたんだよ」

莉子 「いや、合ってます」

愛菜 「なんで自信はあんのよ」

莉子 「なんとなく、です」

二人、笑い合う。

と、通り掛かった岡村、わざとらしく咳払い。

二人、はたと静かにする。

愛菜 「（小声で）つーかあんだ、明日もやったらマジヤバイよ」

莉子 「……」

9. 莉子のアパート・室内（夜）

莉子、電話していて、

莉子 「はい、前にも大家さんから言ってもらったんですけど、

まだやめてもらえてなくて。あの、本当に困ってて……」

× × ×

電気の消えた室内。莉子、ベッドに横になっている。
男の歌い声が聴こえ始め、ぎゅっと目を瞑る。

莉子 「……っさいな」

が、耐えかねて、ドンツと壁を足で蹴る。

莉子、やってしまったという顔で、ハツとする。

歌い声は止まる。

固まっている莉子、音を立てないようにそつと、机
の上のコップを壁に押し当てて、耳をあてる。

壁の向こうからは、何も聴こえない。壁掛け時計の
秒針の音と、押し殺した自分の息だけが聴こえる。

10. 莉子のアパート・室内（朝）

莉子、ハツと目が覚める。壁掛け時計は六時四十五
分。飛び起きて、身支度をする。

11. 莉子のアパート・玄関前（朝）

莉子、急いで靴を足に引っ掛けて、バツと玄関から
飛び出る。屈んで靴を踵まで引っ掛けたり、つま先
を床にトントンとしたりしている。

ふと、隣室の玄関ドアがゆっくりと開いて、ドアと
床の隙間から男の足が見える。

驚いて莉子、咄嗟に部屋の中に引き返す。

12. 莉子のアパート・室内（朝）

莉子、息を押し殺して玄関ドアの裏で固まっている。
隣室の玄関ドアがゆっくり閉まる音。

しばらくしてやり過ごしたかと思い、音を立てない
ようにそつと立ち上がり、一息つく。

途端に、ドアのすぐ裏側から男の歌い声が聴こえる。

静かだが、はっきりと歌詞まで聴こえる。
莉子、しばらく固まる。

咄嗟にガチャッと玄関の鍵を閉める。

歌い声は止まる。

莉子 「……」

と、何か思い出したような顔。

莉子 「……間違えません、間違えません、間違えません」

13.

莉子の実家・外観（朝）

こぢんまりとした庭付きの一軒家。

14.

莉子の実家・リビング（朝）

莉子の母・北川真由（53）、電話していて、

真由 「何あんた急にこんな朝早く電話してきたと思ったら」

真由、本棚から何やら探していて、

真由 「ちゃんと仕事行ってるでしょうね？ 今日休みなの？

え？ うん、あったけど？」

と、大判の本を一冊取り出す。

× × ×

真由、コーヒー片手に座って本を開いている。

莉子の父・北川裕、リビングにやってきて、

裕 「おはよ」

真由 「おはよう」

裕 「卒アル？」

真由 「うん。小学校の。なんか急に写真撮って送れって」

裕 「……莉子が？」

真由 「……見たくなるもんなんだね」

裕 「まあ、捨ててなくてよかったけど」

真由 「意外とさ、嫌な思い出じゃないのかな」

卒業アルバムの裏表紙の見開き。修正液で沢山の箇所が塗りとくられている。その隅に、校歌の歌詞。ページをめくると、体育館のステージでピアノを弾く少女時代の莉子の写真。

（おわり）